

以上の近代西欧科学のあり方は、18世紀から19世紀にかけての産業革命を経過して、自然界の人為的再構成によって生まれる一連の近代産業技術を生み出した。そしてやがて近代西欧科学と近代産業技術は不可分一体のものに見なされ、「科学技術」と総称されるようになったのである。

中岡哲郎はその著『工場の哲学』の中で、1960年代を境に登場した整然たる生産ラインを備えた精密でかつ大規模な機械工場を、実質的に科学の実験室がその規模を巨大化して工場化したものと述べている¹⁴。事実、こうした精密な大型機械工場では、科学実験室と寸分変わらぬ条件下で、日常の生活空間、自然空間には決して存在しない無菌、無塵の空間を工場内に保つために、従業員の操業上の手順（人為）が厳格に規定されているのである。

(5) 人文・社会科学と「人間世界」

このように自然世界を人間の目的論的価値判断に沿って人為的に再構成する近代科学技術の傾向は、まず自然科学において典型的に現れたが、自然科学のあとを追って成立した社会科学、人文科学も当然同様の方向を目指すことになった。

人文・社会科学の対象は、自然科学の場合と異なって人間世界にほかならない。近代自然科学の本質が現存世界の中から、自然と人間とを区別し人間を優越化させて「神の座」に就けた上で、人間が自然を支配する要求として登場したとすれば、近代人文・社会科学は人間の自己認識の要求、つまりまず人間みずからが人間世界を科学の対象として認識し、その上で人間世界を人為的に再構成しようとする要求として登場したと言える。

ただ留意を必要とする点は、元来自然科学であっても、人間の生理的身体が自然世界の一部として科学的対象として扱われ、それゆえ人為的再構成の対象ともなってきたという点である。

これと同様に近代人文・社会科学においても、人間世界（人文的、社会的事象）を人間の生理的

身体と同様のもの、すなわち自然世界と同等に見なして科学の対象として扱うのである。そうすることで、人間世界を人為的再構成の対象に変えようとする点にこそ近代人文・社会科学の特徴があるわけである。

問題は人文・社会科学が対象とする人間世界はいかに方法的に自然世界と同様に扱われようとも、原理的には自然世界や生理的身体とは異質な世界だという点にある。この点は人間世界が自然世界に比して、目的追求的な意志によって作り出され、生み出されるという特質を相対的に抱えている点に起因している。すなわち人間世界自体が現実（sein）を当為（sollen）に沿って変えようとする目的追求的な人間行為によって形成されているという点が、自然世界と相対的な違いを作り出すのである¹⁵。

しかしながら人文・社会科学は自己を科学足り得るものとしようとして自然科学を純正な科学としてモデル視する限り、この人間世界の目的意志的、当為追求的な特質を、相対的に軽く見る傾向を免れなくなる。つまり科学研究の主体としての研究者には、科学の対象となった人間世界を操作し再構成しようとする目的論的価値判断を許しながら、対象としての人間世界自体が示す目的追求意志については相対的に軽く見るという傾向である。この点についてはここでは詳述を避け、また後段で触れることとする。

(6) 近代科学の陥穽：「対話」性の欠如

以上見てきたように、科学研究の歴史は自然科学であれ、人文・社会科学であれ、いずれの時代にも研究に目的論的価値判断が切り離しがたく内在した。すなわち歴史は、古代から中世そして近代へと時代が移るにつれ、研究上の目的論が「自然中心主義」から「神中心主義」へ、そして「人間中心主義」へと移行したこと、言い換えれば「世俗世界のために」から「神の国のために」そして「人間のために」へと移行し、それによって最終

的に対象世界を人間の価値観(目的論的価値判断)に沿って人為的に再構成することを本質的目的とする近代西欧科学を誕生させたのである。

前もって言うておくと、本論文が対象とする近代科学の一分野である現代中国学においても、当然の成り行きとしてその研究対象となる世界(すなわち中国あるいは日中関係を含む中国の対外関係)を自己の目的論的価値判断あるいはイデオロギーにそって再構成することを意図する傾向を帯びるものになる。

「人間のために」なされる近代西欧科学の研究にあっては、研究対象の「世界」と研究主体である「神から自立した人間」がより完全に区別され切り離されるから、「人間」のために「世界」を奉仕させるという目的をもって研究が行なわれる。つまり研究対象の「世界」は、研究主体としての「人間」と対等平等の関係にあるのではなく、「人間」に従属するものとして位置付けられる。

この結果、その研究の「客観性」は、研究対象と研究主体の間の「対話」によっては検証され得ないものとなる。なぜなら「対話」はその言葉の厳密な意味においては、「世界」の上に「人間」を君臨させずに「人間」を「世界」と対等平等の位置に置かなければ原理的に成立し得ないからだ。

こうして「世界」との「対話」性を欠いた科学研究のいわゆる「客観性」は、方法上、研究主体の「人間」の価値観に沿って「世界」の再構成を試みる実験(実証)の成否いかんのみによって検証されることになった。繰り返しになるが、その場合実験(実証)は、その再構成が「世界」に対して優位に立つ「人間」の側からの一方通行的な意図の下になされるという意味で、「対話」の方法と原理的に異なるのである。

今日、近代西欧科学の一翼を担おうとする現代中国学の主流が、ウォッチング＝観察学に偏したものとなっているのも実はその根底に、研究主体の「人間」を研究対象(客体)の「世界」に対し

分離しかつ優位に置く近代科学の弊害が働いて、その方法的検証に、「世界」との「対話」の必要性を認めない傾向があるためにほかならない。

(7) チャイナ・ウォッチングの本質

チャイナ・ウォッチング(中国観察学)も本来、近代科学の特質を共有している以上、研究対象を研究者(研究主体)の目的論的価値判断にしたがって再構成しようとする意図を明確に持つ。それゆえに中国観察学は実際には、研究対象に研究主体が一切手を触れないことを前提とするという意味での厳密な観察学(ウォッチング)とは、その本質を異にするものと言わねばならない¹⁶。

にもかかわらず現代中国学がチャイナ・ウォッチングと呼ばれる場合は、自身の学が他の近代科学と同様その根底に目的論的価値判断が働いている点を自覚しないか軽視し、研究者が研究対象を再構成しようとする意図を持つことに対し方法的に無自覚なことを示しているのである。この点でチャイナ・ウォッチングは他の近代科学以上に多くの問題を孕むのである。比較の問題として念のために述べておけば、戦前戦中の現代中国研究の場合には、方法的にウォッチング＝観察学の立場を採らず、国策に沿った研究を目指すという点で目的論的な価値判断を含み、しかもその点に明確な自覚を持つ場合が少なくなかった。この点は後段で述べる。

繰り返し言えば、「自然中心主義」「神中心主義」「人間中心主義」の3種の世界観が、それぞれの価値観に基づく目的論的価値判断を不回避的に持つこと自体は何らその「認識の客観性」を損なうものではない。同様の論理から、私はチャイナ・ウォッチングが方法的に「認識の客観性」を欠くと主張するものでないことは当然である。

問題は目的論的価値判断の有無にあるのではない。近代科学が研究主体の「人間」を研究対象の「世界」に優越する位置に置くために、「世界」の再構成を「対話」不在の歪んだものにする点にこ